
緋弾のエリア UNITY

出川 戦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のアリア UNITY

【Nコード】

N9197X

【作者名】

出川 戦

【あらすじ】

今回が初投稿になります、出川 戦です。どうぞよろしくお願います。

あらすじは以下の通りです。

主人公、朱葉響哉は、東京武偵高付属中学を受験。しかし不合格となる。

そしてその3年後。響哉は東京武偵高強襲科の入学試験に挑んだ。そこで彼の前に立ち塞がったのは、1人の学生服を着た試験官だっ

た。

これは、物語のプロローグの、さらにそのプロローグ。長いストーリーの序章の序章が、今、動き出す！

プロローグのプロローグの、さらにそのプロローグ（前書き）

はじめまして！出川 戦です！今回が初投稿になります。誤字や意味不明な箇所も多々あると思いますが、どうか温かい目で見てやってください。

プロローグのプロローグの、さらにそのプロローグ

今日、俺は高校の入試に行く。だが、希望する高校はただの高校じゃない。『武偵高』だ。

武偵高とは、武偵を養成する総合教育機関だ。

そして武偵は、凶悪化する犯罪に対抗して近年新設された国家資格で、その資格を持ち武偵免許を持つ者は武装を許可され、逮捕権を有するなど、警察のソレに準ずる活動ができる。

ただし、警察と決定的に違うのは、武偵は金で雇われて動くことで、武偵法で許されている範囲ならどんな仕事でもこなす。簡単に言えば『便利屋』だ。

そんな武偵は、よく見ず知らずの人から恨みを買ったりする。その活動から偏見を受けることも少なくない。

4

さらに、俺が今日受けようとしている学科は強襲科だ。アサルト

生存率は97.1%、つまり、100人に3人くらいは死んでいる学科なのだ。それは訓練中の事故死、クエスト任務の最中での殉学など、さまざまだ。ゆえに強襲科は、『明日無き学科』と呼ばれている。

俺は危険な武偵という職業の中でも、最も危険なその学科を受けようとしている。

それには理由がある。だが、その理由はまた次の機会にするとしよう。

まずは、目の前の入試。3年前は不合格だったが、今の俺なら大丈夫だ。あの時とは、決定的に違うのだから。

プロローグのプロローグの、さらにそのプロローグ（後書き）

主人公の説明をしておきます。

朱葉響哉

身長178cm、体重74?。ただし、体脂肪率は1桁。
東京武偵高強襲科のSランク武偵。だが彼は3年前、東京武偵高付属中学を幼馴染と共に受験し、彼1人が不合格となった。

その後、先に進んでしまった幼馴染に追い付くべく、東京武偵局鑑識科の父親に稽古をつけてもらい今に至る。

キンジ同様、人を惹きつけるカリスマ性のようなモノがあり、面倒な事は最小限に抑えたがるタイプ。

最近は深夜アニメに凝っていて、ライトノベルなんかも好き。

こんなキンジですかね。ちょっとした能力というか技術も持ち合わせていますが、それは次か、その次の話で明らかになります。

EXAMINATION 1 (前書き)

緋弾のアリア UNITY 第2話です。

緋アリアを言っているわりにアリアが出てくるのが当分先なのですが、そこはご容赦ください。

さて、今回は響哉の入試の話です。響哉は無事合格できるのか・・・
・・・？

EXAMINATION 1

バスに揺られてやってきたのはレインボーブリッジの南に浮かぶ、東西500m、南北約2kmの人口浮島メガフロートの東京武偵高だ。当たり前だがここが試験会場だ。

俺は招集時間の15分前に到着したのだが、俺が来た時にはすでに百人近くの受験生が集まっていた。

筋骨隆々のゴリラみたいなヤツやヒョロすぎてこっちが心配するよくなヤツもいた。だが、そんなヤツらはどうでもよかった。

なぜなら、俺は今、3年前よりもはるかに緊張しているからだ。さらに、この場の空気が俺の精神を潰しにくる。

全員が、なんと言うか殺伐としているのだ。心臓が弱いヤツなら、今頃救急車で運ばれているだろう。

この中にも、世間一般で『天才』と呼ばれる者も何人かいるのだろう。その天才たちと競っていけるのか、俺はすでに、この空気に呑まれかけていた。

俺の番が来た。

強襲科の試験は、敷地内にある廃ビルに20人ほどの受験生を武装させて放り込み、その中で拘束し合うという一昔前ならPTAや教育委員会とかで大問題になるようなものだ。まあ、今ならそんなことはないが。

言ってみれば『実践』だ。『実技』じゃないのがミソだな。

あと、廃ビルの中には試験官が何人が紛れ込んでるらしい。面倒くさいことこの上ない。

受験生に渡された銃は、『グロック17』だ。
軽口径で反動も小さく、装填数も17+1とそれなりに多い。武偵を志す者ならこれくらいは扱えなければならぬ代物だ。

ビルの一角に連れてこられ、ついに試験が始まった。緊張で汗ばんだ手でグロックを強く握りながら、俺は足音を殺して動き出した。

.....コン.....

微かに、物音が聞こえた。この先の階段からだ。俺の体に緊張が走る。

一度深呼吸してから、壁に背を向けながら歩き出す。

そして、角から飛び出し銃口を正面に向けた。

だが、俺の目の前には誰もいない……ように見える。

だが、上に登る階段に積まれた瓦礫の山がある。多分あそこに隠れて不意打ちを仕掛けるつもりだろう。

だが、バレてしまっっては不意打ちもクソもない。

「ツチ。向こうを捜すか……」

わざと聞こえるように大きな舌打ちをし、これから向かう先を教え
てやった。

俺は角の柱の陰に隠れ、息を殺してソイツを待ち構えた。緊張で口
の中が乾ききっている。

ザリ……ザッザッザ……

砂を踏み分ける音が聞こえる。どうやらノコノコやってきたようだ。

「動くな！」

角を曲がってきた瞬間、さっきのヤツの頭に銃口を向ける。彼は両
手を頭に付き、銃を捨て大人しく捕まった。

これで、まず1人だ。あと18人と試験官がいる。まだまだ先は長
いな。

一つ深呼吸し、また俺は廃ビル内を散策し始めた。

すると、銃声が聞こえたのでそこに向かって早足で向かった。

そこに着く頃には戦闘は終わっていたらしく、勝った受験生が負けた受験生を捕まえようと意気揚々と縄を持って無防備な背中を俺に晒していた。

俺はグロツクを構え、先程の勝者の後頭部に銃口をつきつけた。

「浮かれているところ申し訳ないが、銃を捨てて大人しくしてくれないか？」

ちよつと調子に乗ってきた俺の言葉にさっきまでの勝者は敗者へと移り変わり、三日天下どころか三分天下にもならず御縄を頂戴となった。さっきコイツに敗けた受験生はどうやら足に銃弾が掠めたようで、血が出ていたので一応応急処置はしておいた。衛生的に悪そうだからな、このビル。

その後そいつも拘束して俺は計3人を捕まえた事となった。気がつけば緊張は無くなり周りがよく見えるようになっていた。

そこからは、ちよつとした無双だった。

すぐに他の受験生16名の内13名を、奇襲や罠などで捕縛した(残り3名は誰かに捕まっていた)。そして、抜き打ちで潜り込んでいた教員も4名捕まえた。

正直、この試験は俺に有利すぎる。

俺は中学時代、武偵の父さんからある技術を教えてもらっている。技術と言えるのかは正直微妙だが。

それは、『観察』だ。周りをまんべんなく見渡し、そこから少しでも不自然な点などを見つけ、それに焦点を合わせるといって技術だ。父さんは昔は警視庁鑑識課で今は鑑識科レリアなので、そこで磨き上げたモノなのだろう。

だが、俺はそれに加えてもう1つ付け足され、強化されている。

それが、『直観』。

去年までは『観察』で視た情報からしかできなかったのだが、今では『ただ視界に入るだけで』僅かな違和感を五感全てを使って文字通り『感じる』のだ。その的中率は、ほぼ100%だ。

そして、その感じた違和感から無意識に情報が頭に入ってくる。ちよっとした『未来予知』のようなモノだ。

だが、それもアバウトなものではない。『ここに誰がいる』程度の事しか解らないが、それだけ解れば十分だった。

この能力？を、俺は『第六感』と呼んでいる。漫画みたいな便利能力じゃないのがたまに傷だ。

だが、そのお陰で多くの受験生と試験官を無力化できた。この勢いで最後の1人も拘束したい。

そう考えている時だった。

カツ……カツ……カツ

足音が、俺のいる階に響いた。

誰かがこっちに向かって歩いてきているのだろう。それは間違いなく、最後の試験官。

すぐさま角に隠れてグロックの残弾を確認する。

よし！弾は全部入ってる。

足音がしなくなった。どこかに隠れているのか、それとも去ったのか。

確認のためにナイフを出してそれを鏡の代わりにし、様子を窺うかがおうとした時だった。

ターン！ キイーン

銃声と、ナイフが弾かれた音。さっきのヤツは、拳銃で俺が僅かに出したナイフを撃つたのだ。

どんだけ高い技術を持ってんだよアイツ………。

だが、一瞬だがヤツの姿がナイフに映った。

着ていた服は、多分武偵高の制服。長髪だった。顔はよく見えなかった。

なんで学生が試験官をやってたんだよ。他のは教師だったのに。

ヤツの事は学生教官と呼ぼうと決めた時だった。

……ゾクッ！

身体に寒気が走った。

それは、学生教官の視線と、殺気によるモノだった。ただ見られただけでここまで怖いものなのか！？

だが、そんな恐怖は長くは続かなかった。すぐに身体は慣れ、寒気は消えていた。

第六感が、逃げると告げてくる。だが、俺は逃げない。逃げたら負けになるから。

俺は、負けられない。負けてなんか、いられない！

柱の陰から飛び出し、グロツクの9ミリパラベラムを4発撃つ。

これは牽制で、相手の動きを視るためのモノのだが、学生教官は思いもつかなかった行動で俺の弾を避けた。

ターン キーイン

さっきのナイフの時と似た音が響く。俺は目の前の光景が理解できなかつた。
だが、第六感がソレを教えてくれた。

学生教官は、俺の撃つた『銃弾を撃つた』のだ………！！

T O B E C O N T I N U E D

EXAMINATION 1 (後書き)

連続投稿です。

かなり長めに書いたつもりですが、思ったより短いですね。驚きました。

ところで、響哉と戦っている学生教官ですが、実は原作でかなり重要なキャラだったりします。もうお分かりだと思いますが。

実は彼、原作時間ではまだ20歳なんですよね。なので多分本当はいないんだろうとは思いますが、東京武偵高の生徒さんになってもらいました。そこは二次創作だからということをお願いします。彼の正体は次で明らかになります。

EXAMINATION 2 (前書き)

多分これで入試の話は終わりです。そして、学生教官の正体が明らかになりました！

では、本編どうぞ。

EXAMINATION 2

可能なのだろうか。

銃弾を、拳銃で撃った銃弾で弾くという芸当が。

だが、信じなければならぬ。

目の前で、実際に起きた現象なのだから………！

俺はすぐさま瓦礫の山の陰に隠れ、学生教官の様子を窺う。だが、彼は隠れようとしなかった。

一度、バシないように銃口を隠しながら発砲してみた。だが、さっきと同じように彼の銃弾によって弾かれてしまう。

さっきのは多分、当たりそうだったのが1発だけだったからそれだ

け狙って撃つたのだろう。器用すぎるだろ。

あの銃は、コルト・ピースメーカーだ。今では博物館にでも飾つてあるような骨董品だが、アレで俺の銃弾を弾いているのは間違いない。現に銃口はこちらに向いている。

……これでは埒が明かない。

こうなったら、アルカタで勝負を着けるべきか……？
いや、彼は俺よりもっと厳しい訓練を積んでいる。いくら第六感があつても、身体がソレに追いつかず、反撃を受けてしまえば元も子もない。

事実、彼の格闘センスは未知数だが、俺より高いことは間違いないと考えて行動したほうがいいだろう。『武偵憲章7条 悲観論で備え、楽観論で行動せよ』の前半だ。

「いつまで隠れているつもりだ？」
学生教官が、不意に言葉を発した。まさか、戦闘中に話しかけられるなんて思ってもみなかった。

「そつちが出てこないなら、こつちから行くぞ……！」
威圧的な低音でそう言った後、学生教官はダツと床を蹴るように走りだした。

さっきまであった俺と彼の距離は、およそ12m。それが、一瞬で

縮まり気がついたら俺の横まで来ていた。ものすごい瞬発力だ。

ピースメーカーの銃口を向けられる前に、俺は背面跳びのように後ろに跳び退く。

ダァン　ダァン！

学生教官の2発の銃声が響く。だが、その銃弾は空を切り、壁にめり込んだ。

ピースメーカーの反動の隙を衝くような形で、俺はグロックで学生教官の肘と肩を撃とうとする。

ここに当たれば痛みで銃を手放し、先の戦闘でこつちが有利になる。だが彼はあたかもそれを読んでいたかのように身体を捻り、銃弾2発をかわす。そんなのアリかよ。

彼は右手のピースメーカーを腰のホルスターに入れながら、左手をポケットの中につっ込んだ。なにか武器を取り出すのだろう。第六感が警告してくる。

避けなければ……！

「詰めが甘い……！」
彼が取り出したのはバタフライ・ナイフだった。シャキンという金属音を出し、その緋色の刃をむき出しにする。

ソレによる攻撃が右肩にくると解っていた俺は、ナイフが突き出される瞬間に身体を左に倒す。

容赦の欠片も無い突きが、俺の肩があった場所を通った。当たって

たらどうする気だったんだ、この教官……。

学生教官はその端正な顔を驚愕の色に染め、見開いた目で俺を見ていた。

「これで終わりだ……！」

グロックを彼の左肩に押し当て、トリガーを引こうとした。まあ、この人も俺の肩狙ってきたしいいよな？

ダアン！　　パリイン！

俺は容赦無くトリガーを引いた。だが、彼の肩には銃弾は当たらず、窓ガラスを貫通してあさつての方向に飛んで行った。

彼は、俺がトリガーを引く直前にグロックを殴り、射線を無理やりずらしたのだ！

俺はこれ以上この体位は危険だと判断し、腹に爪先で思いつきり蹴りを喰らわせ、立ち上がって銃口を向けた。この間、僅か0.8秒。訓練のたまものだ。

「……まさか、あの突きをかわすとは……！」
学生教官の口元が歪んだ。なにがそんなに楽しいのか、俺には解らん。

「アンタこそ、あの一瞬で俺の拳銃から逃れるなんて、化け物か？
そう言う俺の息は荒い。だが、向こうは平然としている。これが、格の違いってヤツか？

「化け物はないだろう。俺はお前と同じ、人間だ。今くらいの回避

は、鍛えられた人間なら造作もないことだ」

どこか嫌味なように彼は言った。だが、彼の言う通りだ。俺程度のヤツなんて、一瞬で殺してしまうこともできるヤツなんて、世界中探したら何百万何千万もいるだろう。

彼は、その内の1人にすぎないのだ。きつと。

「……………これからお前に見せる技は、『鍛えられた人間』が編み出した、究極の銃技だ。だが、それは決して視ることのできない銃技でもある。まさか、こんな入学試験でコレを使うことになろうとは思わなかった」

「……………?どういうことだ」

俺の言葉を聞き流し、学生教官はバタフライ・ナイフを収め、ポケットの中に入れた。

彼は、棒立ちしていた。まるで、『撃ってください』と言わんばかりに。

普通ならソレを挑発行為ととるだろう。だが、第六感は警告してきた。彼は、『危険だ』と。

何かが来る。そう思うと身体は自然と硬直する。だが、ここからすぐに逃げなければいけなかった。

この、立ち位置から。

僅かに、学生教官の爪先が動いた。俺はその瞬間になってからようやく飛び退くことができた。
だが……………

ダァン！

学生教官の真ん前に、カメラのフラッシュのようなモノが光り、銃声が聞こえた。そして、俺の腕に金属バットで殴られたような痛みが襲った。

「ぐあ！？」

間違いない。俺は今、撃たれた。

もし防弾アーマーが無かったら俺の腕は骨折しているだろう。今でもそう思えるほど痛い。

左手で撃たれた右腕を抑えながら、俺は彼を睨みつけた。俺の息はさらに荒くなっている。

「……………まさか、『不可視の銃弾^{インシジレ}』が視えたのか……………！？」
彼はさつきよりも目に見えて驚いていた。目は大きく見開き、その視線は真っすぐ俺に向けられている。

「視えてませんよ。『不可視』って自分でも言ってるじゃないですか」

荒い息のまま、俺は口元を歪めた。きつと今の俺の顔は悪役みたいになっているんだろうな。

「……………フツッ。これは面白いヤツと会えた。たまにはこんな

仕事もやってみるものだな」

そう言いながら、彼は銃弾を中に投げ、ソレを取り出した。ピースメーカーの弾倉に入れた。

たしか、テレビで似たようなのを見たことがある。

あれはクイックリロードというテクニクだ。実際に見たのは初めてだ。元々リボルバーを使う武偵が少ないからというのもあるが。

だが彼はせっかく装填したピースメーカーをまたホルスターに入れてしまう。また『不可視の銃弾』^{インビシブル}が来るのだろう。

俺の推理はどうやら的中したらしい。彼はまたさっきと同じような姿勢をとっている。多分、アレが構えなのだろう。

爪先が僅かに動いた。コレは不可視の銃弾の予備動作だ！^{インビシブル}

今度はさっきよりも早く反応でき、放たれた3発の銃弾は俺に当た
ることはなかった。

ソレを避けながら、俺はグロックで学生教官を狙い撃つ。だが、俺
の銃弾は不可視の銃弾により弾かれてしまった。^{インビシブル}

アレとコレは併用できるのかよ……。

さっき撃った銃弾は2発。始めに3発撃ったから向こうにはもう弾
は1発しか残っていない。

俺は3発の銃弾を続けて撃ち込む。

ダァン キキキイン

銃声とフラッシュは1回。だが、銃弾が弾かれた音は3回した。

う、ウソだろ……!?

……野郎、1発の銃弾で3発の銃弾を弾きやがった!

始めに俺が撃った弾を弾き、その弾かれた弾で2発目を弾き、さらにその銃弾で最後に撃った銃弾を弾いたのか?自分で言ってるわけがわからなくなるぞ。

学生教官はクイツクリロードで弾倉に弾を込めた。これで俺は残り4発。向こうは6発になってしまった。

マガジンの交換なんてやらせてくれる隙もないし、普通に撃ってもアイツには届かない。

なら、普通にやらなければいい。

ダッ!

俺はその場から駆け出し、学生教官の懐に潜り込もうとする。被弾は覚悟していたが、彼はなぜか撃ってこなかった。

だが、今の俺にはそんな事どうだって構わない。

俺はまず1発、避けられることを前提で9ミリパラベラム弾を撃つ。案の定、彼はそれを避け、こっちに銃口を向けてくる。

だが、その距離は手を伸ばせば届く距離まで縮まった。

ガツツ　　ダァン！

彼の銃を持つ手を殴り、射線を逸らす。

俺がさつきやられたことを、そのまま返してやった。

右膝蹴りを鳩尾みぞおちに喰らわせ、空中で身体を捻り、左足で回し蹴りする。

だが、その左足を当身の要領で掴まれてしまい、俺は投げ飛ばされた。

一体どんな筋肉してるんだ、コイツは……………！

壁に強く背中を打ちつけて、俺は前のめりに倒れてしまった。

すぐさま起き上がるうとするが、額に熱い物が当てられているのを感じた。

目の前には、学生教官が立っていた。その手に握られているピースメーカーの銃口は、俺の額に押しつけられている。

「……………参りました」

俺は、そう言うしかなかった。

完敗だ。彼はほとんど息を切らしていない。その点俺はどうだ。持てる力のほぼ全てをぶつけたような感じだぞ。圧倒的すぎる。

学生教官はピースメーカーをホルスターに入れ、戦闘態勢を解除した。

「……………俺って、不合格ですか？」

「なんで、そう思うんだ？」

学生教官はケータイで誰かとメールしている。試験の結果を報告しているのだろうか。

「最後の近接戦。俺の実力じゃアンタには絶対に及ばないことは誰が見ても明らかだった。それでも無理して接近戦に持ち込んだのは、明らかな判断ミスです」

アレは、俺が勝負を焦ったからやってしまった行為だ。無理せず、撤退しておくのが正解だと思う。それをつまらない意地を張って絶対に勝てない勝負に自分から持ち込んだのだ。実戦なら死んでもおかしくない。

「……………あのなあ、コレは入試だ。受験生の力量を測るのが目的なんだ。確かにお前の判断は間違っていたのかもしれない。だが、そのお陰で近接戦の強さが分かった。安心しろ。お前は合格だ」

その言葉を聞いた時、体から力が抜けて、俺は膝をついてしまった。

「俺が……………合格……………？」

「当たり前だ。お前を落としたり、今年の強襲科は超少数アサルトになってしまふ。ランクは、そうだな……………俺の見立てだと、Sランクだな。最低でもAはある」

Sランク・・・強襲科のSランクは、たしか特殊部隊1個中隊と同等の戦力として評価されるんだよな。どうにも実感がわかない。

「あと、お前の名前は何だ？」

パンパンと制服についた埃を払いながら、学生教官は聞いてきた。

「俺は・・・・・・・・・・あかはきょうせ朱葉響哉」

「響哉か・・・・・・・・。覚えた。俺は遠山金一だ。入学式の日にもまた会おう」

そう言っつて学生教官・・・・・・・・金一さんはどこかへ行ってしまった。

俺も、彼の事は3日間は覚えていてやるわ。

T O B E C O N T I N U E D

EXAMINATION 2 (後書き)

金一さんはローマ武偵高の留学から帰ってきたときに、聖書なんかの一説を口ずさむ人ですが、作者は聖書なんて読んだことはおろか触ったことすらありませんのでそこら辺は省略させてもらいます。この話では、金一さんは現在高3。キンジは中3となっております。響哉は今現在は中学生ですが、次の話から高1になります。高1つて今から思えば天国でしたよホント。

さて、これで入試は終わったので次からはいよいよ武偵高での生活が始まります。響哉は一体どんな銃を使うんでしょうね。相部屋の人の名前を考えないと。

戦兄弟（前書き）

4 話目です。

よじややく武偵高の話です。

戦兄弟

4月の上旬、俺は武偵高の入学式に出席していた。

つまり、合格したのだ。武偵高に。それも、あのとき金一さんが言ったように、Sランクで。

3日以上経ってもあの人の名前を覚えていた自分の記憶力にも驚いたが、やはりその衝撃は大きかった。

そして今、俺はその武偵高の防弾制服に身を包み、爺さんの形見の自動式拳銃『ブレン・テン』を携え、火薬の臭いからして本来は射撃訓練か戦闘訓練をしているのであろうこの体育館にいる。

正直、今ここに立っている事が嬉しいと思える。ここがゴールなのではないか。もう俺は十分満たされたのではないかとついつい考えてしまう。

だが、それは違う。

今いるここはスタートでしかない。つまり、俺はそのスタート地点にやって来ただけにすぎないのだ。

自惚れてはいけない。そんなヤツから死んでいくのだ。武偵とい職業は。

入学式と武偵高の説明会が終って外に出ると、目の前に広がっていたのは桜並木だった。

日本で多く見られる種類のソメイヨシノは、日露戦争時代に日本が『この桜の花の様に美しく散ってこい』という意を込めて日本中に埋めまくったそうだ。このソメイヨシノのDNAを辿ると、1本の原種に行き着くらしい。つまり、全部クローンのような物なのだ。ちなみにこのソメイヨシノ、枯れる時は日本中の全ての木が枯れる。中2の時先生が言っていた。

そんな至極どうでもいいうんちくを思い出してしまい、若干気分が萎えた俺の前にいたのは、入試の時に闘った学生教官こと遠山金一先輩だった。

「こんな所で会うとは、奇遇だな」

金一さんは桜の木を見上げながらそう言った。桜はもう散り始めており、花びらが宙をひらひらと舞っている。アイドルと偽って一般人にアンケートしても全く疑われそうにない整った顔立ちをしている金一さんがその中にいると、映画か写真集の撮影のようには見えにくる。

「さつきまでそこで1年の説明会があったんですから、当然じゃないですか。何か用ですか……?」

この人がここにいるのは、ここに何か用があったのか俺か他の生徒に用があったかのどっちかだ。

実力的にSランクの彼が、春の陽気に誘われてこんな場所に来るわけがない。

「……本当、お前は容量がいい。その通り、俺はお前に用があつて来た」

金一さんは一度言葉を止めた。

その時、強い風が吹き、桜吹雪が舞い散った。

「……響哉。俺の、『アミコ戦弟』になれ!」

……突然何を言い出すんだこの人。

「え〜と……なんで、俺なんですか？」

「お前と入試で闘った時、俺は思ったんだ。コイツは、絶対に強くなるとな」

「……………？つまり、自分の手で俺を鍛えたい、って事ですか？」

もしそうならこの人どんな神経してんだよ。現実にそんな人がいるなんて信じたくないぞ。

「まあ、半分はそうだな。もう半分はお前にやってもらいたい事があるからなんだが……………」

「要するに、俺を強くして後で自分の面倒事を俺に押し付けるって言いたいんですね。だったらそんなのお断りですよ」

俺は金一さんの横を通り、さっさとこの場から去ろうとしたのだが……………

「そうではない」

チャキッ

どうやら拳銃ピースメーカーを向けられているようだ。冷たい汗が背中を流れる。

「安心しろ。悪いようにはしないさ」

「銃口向けられて安心できるヤツなんて世界中どこ捜してもいませんよ」

俺は頭の横に手を置きながらそう言った。どんな画だよ、コレ。

つてか、これって脅迫じゃねえの？

「もう一度訊くが……俺の戦弟になるか？」

「拒否したら？」

「さア？」

金一さんはフツと一度笑ってからそう言った。お願いだからそんな恐怖心を煽るようなやり方をしないでくれ。めっさ怖い。

「……わかりましたよ。なりますよ。先輩の戦弟に」

俺は嫌々というカンジに金一さんの誘いを承諾した。断ったらどうなるかわかったモンじゃないからな。

……実を言うと、俺はこの人に関わると面倒事に巻き込まれるような気がしていた。これは、別に第六感でも何でもない。

本当にただの『勘』だ。

だが、俺はその不確定な勘がまさか当たっているとは、この時は微塵も思っていなかった。

戦兄弟（後書き）

はい、という訳でめでたく響哉が金一さんの戦弟になりました！

コレが物語にどう影響していくのかはさておき、響哉の持っている『ブレン・テン』についての簡単な説明をしたいと思います。

ブレン・テンとは、1983年にアメリカのドーナウス& amp; ディクソン社が開発・販売していた自動拳銃です。ブレン・テンの「テン」は10mmの口径を指しているんですね。使っている銃弾は『10mmオート』という9mmパラベラム弾より高い威力を持ち、.45ACP弾より小さい弾丸です。当たった時の衝撃は、なんと.357マグナム弾と同等というのですから凄いですね。

銃本体は、CZ75をベースに作られていて、コンバット・シューティングの第一人者である、ジェフ・クーバーが開発に参加しています。

ですが、マガジンケースの生産が販売に間に合わなかったこと、理想的なスペックを追い求めた結果これといって特徴がなく魅力の乏しい銃になってしまった等の理由によってその売上はあまり良くありませんでした。よって、この銃は僅か3年しか生産されなかったのです。

ですが、銃弾の初速は410m/sと他の拳銃と比べると速く、銃としての性能は高いものでした。

ウィキとかを参考にまとめ上げました。間違っている所があれば指摘してくれると助かります。

只者では無い(前書き)

どうも。ブレン・テンの説明で燃え尽きかけた作者です。
今回からちよくちよく時間が跳びますがご容赦ください。

では、本編どうぞ！

只者では無い

武偵高の上下関係は、まさに軍隊のソレに近い。^{クエスト}任務の時に作戦を迅速に遂行するためにそういう風になっている。

本来なら1年は2年3年のパシリにも等しい雑用（空薬莢をひたすら拾い続けるなど）を延々と繰り返していかなければならないのだが、俺の場合は少し違う。

今からだともう1週間も前になる。^{アサルト}強襲科の体育館に、訓練目的で初めて来た時だった。

先輩達に「空薬莢を拾っておけ」と命令され、俺もそれを当たり前だと思つて拾い始めようとした時だった。

金一さんがどこから現れ、「コイツは俺の^{アミコ}徒友だ。そんな雑用《ゴミ拾い》をやらせておく時間は無い」と言つてその先輩達を一蹴した。その日からルームメイトの3人には羨ましがられ、面倒な事になった。

そして今俺はどういう訳か武偵高のハズレにある、レインボーブリッジに向けられた巨大看板の裏（通称、看板裏）で金一さんに拳銃で撃たれまくっている。

なぜこうなったかというと、遡ること1時間前……。

「お前は射撃を撃つ前から避けられる。その能力をもっと昇華すべきだ」

と言われ、その訓練としてピースメーカーに追われている。1時間も。

あんだけ撃つてよく残弾が減らないなと思うと、彼の足元にはそれなりの大きさの箱に銃弾が溢れるほどに入っていた。よくあんなに持ってきたもんだな。

そう言う俺も今まで1発も当たって無い限り、どうかしてるんだろうけど……。

入試の日から今日まで『第六感』について新しく分かった事がある。

それは、『戦闘経験を積むにつれてその精度が上がっていく』という事だ。

現に、今では相手の視線から『どこを攻撃してくるか』が読める。入試の時と比べると目覚ましい進歩だ。

ムリに理論づけるならば、極限の集中力を維持し続ける事でその平均値が上昇し、第六感の精度もソレに比例して伸びていくということだろう。これはあくまでもただの仮説だが。

実際のところどうなのかは俺にも分からないし、分からなくていい。ただ結果的に強くなっているのだから。難しい事を考えて立ち止まるよりは、ソレを投げ捨てて前に歩き出した方がいい。

俺には、立ち止まる暇など無いのだから……………。

それから数時間後。空は茜色に染まり、カラスがカアカアと鳴きながら飛び回るさまを見上げながら、俺は地面に大の字で倒れ込んでいた。

始めは全部避けていたのだが終盤になると段々と疲れが溜まってきて、何発も銃弾を当たってしまった。身体のおちこちが痛い。

「今日はここまでだ。明日も昼休みが終わったらここに来い」
そう言って金一さんはさっさと帰っていった。俺をここに放置する気がよあの人……。

俺はしばらく夕焼け空とカラスを見上げながら、動けるまで回復するのを待っていた。

こうして夕焼け空を寝ながら見上げると、昔を思い出す。

ただ、あの時と違うのは、横に『彼女』がいない事だ。

俺が武偵になるきっかけを作った人であり、俺が強さを求めて父さんに頭を下げた理由でもある、『彼女』……………。

「……………なんで、逝っちゃったんだろうな。お前が……………」

俺は、思わず口に出していた。だが周りには誰もおらず、さっきまで空を飛びまわっていたカラスも、どこかへ消えていた。

俺の眩きは、沈みかけた太陽が照らす看板裏に溶け込んでいった。

T
O
B
E
C
O
N
T
I
N
U
E
D

只者では無い(後書き)

響哉が最後に呟いていた『彼女』ですが、今回の小説のメインヒロインになる予定です。

ですが、しばらくは名前は出しません。他の小説と違う所を作りたいですからね。

人間関係には気をつけた方がいい（前書き）

どうも。タイトルは本文とあまり関係はありません。

今回は響哉の同居人の3人が登場します。まあ少しだけですけれど。それから、原作でも表紙を飾った事のあるあの人が登場します！

人間関係には気をつけた方がいい

俺が武偵高に来てから早1カ月。長いようでものすごく短かったと思う。

その短い間に微妙にヒビの入っていた同居人との友好関係を再構築できた俺はきつと大物なのだという事にしておく。

現在、俺は食堂で強襲科寮の同居人であるアサルト榊原龍、ミカキ八雲戒、ミそのは御園春樹の3人と共に昼飯を食べている。

俺と春樹はサンドイツチ。戒はハンバーガー。龍はBLTサンドと見事にパン系で統一されている。日本人の米離れは本当だったと信じざるを得ないな。

「響哉、今日から民間からの依頼受けれるんだろ。すぐに行くのか？」
「クエスト龍がその大きな口でBLTサンドを頬張りながらそう言う。リスかよお前は。」

「口に食いモン入れながら喋んな」
俺はケータイを取り出し、昨日金一さんから届いたメールを3人に見せる。

そのメールの内容は、至極簡単。

『明日からお前も民間の依頼を受けられる。よって、お前を俺の行

く依頼に同行させる。待ち合わせ場所は後で連絡する』たったこれだけだった。

「くっそ〜。いいよな響哉は。Sランクだし戦兄アミノがいて」

「本当だな。俺達はまだ簡単な依頼しか受けられないのによ」
龍と戒が愚痴をこぼしているが、俺はそれを華麗にスルーしてケータイをしまつ。

「でも、それだけ危険が伴うんだから一概に羨ましいとは言えないね」

おお！ナイスフォローだ春樹！もつと言ってやれ！

「だったら、1日でも早く死んでくれ」

「日じゃなくて秒だろ」

……また始まったよ。死ぬ死ぬ回強襲科の悪い癖が。

俺や金一さん、春樹はそうでもないが、強襲科のヤツらはまるで挨拶のように死ぬ死ぬ言ってくる。もう聞き飽きたんだよ、そのネタは。

「一体お前らは1日に何回死ぬ死ぬ言ったら気が済むんだ。たまには死ぬ以外言えないのか？」

「じゃあくたばれで」

「そういう事を言ってるんじゃないよえんだよー！」

まったく、これだからこの2人は……………。テレビのリモコン

の争奪戦もこの2人だけがやってるし、おまけにその時に絶対と言
つていいほど拳銃を抜きやがるからリビングにはパテで埋めた弾痕
がいくつも残ってやがる。おまけにこの前そのテレビをぶっ壊して
しまったのだから鬱陶しいこと山のごとくだ。

「ま、まあまあ・・・響哉君も落ち着いて」

ホント、春樹くらいしかまともなヤツはいないよ。いや、この学校
でまともなヤツを捜すのがそもそも間違いないのか。

昼飯を食べ終わった後、俺は3人と別れてモノレールの駅に向かう。
そのこのホームが、金一さんに指定された待ち合わせ場所なのだ。

約束の時間の30分も前に着いてしまった俺は、ホームの椅子に座
って時間が経つのを待っていた。

・・・コクン・・・コクン・・・

どうやら最近の金一さんによる無理な訓練の疲れが溜まってきてい
るのだろう。猛烈な睡魔が俺を襲ってきた。

俺はその睡魔に勝てず、意識を手放してしまった。

「……や……きよ……や……響哉！」

誰かが、俺の名前を呼んでいた。

「っは」

俺はどうやら転寝うたたねしてしまったらしい。すぐに胸のホルスターのブ

レン・テンを確認する。寝てる間に盗られていたら大変だ。

……よし。拳銃は大丈夫だ。

「響哉、武偵がそんな無防備に寝ちゃダメよ。武器を盗られたりしたら大変なのよ」

「す、すみません」

正論だ。魔が指してっっていうのもありうる。凶器を持つ者はそれだけの義務があるのだ。武偵法9条も同じ。拳銃や刀剣を扱う者は、それ相応の責任を負わなければならない。

「次からは、気をつけてね」

………ところで、さっきから気にはなってたんだが………
……誰、この人。

長い茶髪の三つ編み、薔薇色の唇に碧眼。目が覚めるような美人。そして着ている服は武偵高の制服。こんな娘、武偵高にいたっけ………？

なぜか、このタイミングで第六感がある人物の名前を引っ張り出した。張ってきた。

だが俺はそれを真っ向から全否定した。というか、信じたくなかつ

た。

目の前にいる娘は、俺が今まで見た中でもっとも綺麗でカワイイ、まさに絶世の美女だ。今まで俺が見てきた女子が、極端に言つとアイコンに見えるくらいの。

だからこそ、信じたくない。受け入れたら、俺の今までの大して長くも無い人生を呪いたくなってしまう。

「こらっ！返事は？」

「……………あの、あなたはもしかして、その……………」

今日ほど、第六感が間違いであつてほしいと思つた事は未来永劫ないであろう。

だが、現実はいつだって残酷なものだ。何かの漫画でそんな言葉を

見た気がする。

「遠山、金一さんですか……?」

「はっ」

目の前の娘はくりくりと頷いた。

俺は、今日この日………

神はいないのか、もしくは死んだんだと確信した。

T
O
B
E
C
O
N
T
I
N
E
D
.
.
.
.
.

人間関係には気をつけた方がいい（後書き）

かなりやらかした感があります。

原作の10巻の最後に、キンジがカナに「兄さん」と呼んでも返事しないと書かれています。今回の響哉のコレは向かい合って「あなたは……。」と尋ねているのでカナにも自分に問いかけているというのがわかったという事で答えられたとしておきます。文章力が無いのが恨めしい……。

龍、戒、春樹のプロフィールも機会があれば載せたいと思います。

HSSは男のロマン（前書き）

今回は金一さんは出ません。カナが出ます。

それから、同居人3人の内榊原龍のプロフィールを掲載しておきます。

榊原龍

東京武偵高1年D組。強襲科Bランク。

身長174cm、体重78kg。体脂肪率は1桁。

射撃よりも近接戦の方が得意で、剣道4段。徒手格闘も強い。

祖父が剣道場を開いており、小さい頃から剣道をやっていたが武偵に強い憧れを持ち、東京武偵高に入学する。

一見細身だが実は筋骨隆々で、単純な力押しなら響哉では手も足も出ない。

使用している拳銃は、日本警察でも採用されている『H&K P2000』。

他の2人もその内書いておきます。

HSSは男のロマン

中学の時、俺の家の3軒隣に住んでいた大学院生の人が、こんな事を言っていた。

「オカマとかオネエってイケメンなヤツが多くない？」

その時俺は、「そんなバカな」と笑っていた。オカマと言われて想像していたのが双子の兄弟の方ではなくラクダの方だったからだ。

だが、俺は今日この日、その戯言が真実であったと認めざるを得なかった。

「この姿の時は、私の事は『カナ』って呼んでね」

「……はい」

現在俺と金一さん……いや、カナはモノレールに乗っている。

平日の真昼間という時間なので、乗客は少ない。

金一さんは、誰が見てもイケメンだと思うだろう。そして、今俺の目の前にいるカナも、10人いれば10人がカワイイと言っただろう。

だが、1つ解らない。それは……

「なんで、女装してるんですか？」

これは、絶対に訊かなければならない事だとその時俺は思った。

「人前で女装してるなんて言わないで。

うーん……話せば長くなるんだけど、いいわ。戦兄弟^{ファミコ}同士で隠し事は無しよ。教えてあげる」

……どうでもいいけど、なんで声も口調も女性のソレになってるんだ？特に声はどうやって変えてんだらう。

「響哉は、『サヴァン・シンドローム』って知ってる？」

「……………サヴァン・シンドローム。たしか、脳の一部が損傷したりすることで、他の部分の活動がその損傷した部分を補うために活発になり、結果として一部の能力が飛躍的に上昇する症状の事だったか。高速で暗算ができたり見た物を一瞬で憶えたりするなんてのがあったな。」

昔見たテレビでそんなことを言っていた気がする。」

「多少は」

「私達遠山一族は、ソレを血……………つまり、DNAとして先祖代々受け継いできているの。私はその事を『ヒステリア・サヴァン・シンドローム』、通称『HSS』と呼称しているわ」

「ちょっと待って下さい。そのHSSっていうのと、あなたが女装しているのはどういう関係があるんですか？」

するとカナは「しーっ！」と周りをキョロキョロと気にし始めた。どうやら自分が女装していると周りに知られたくないらしい。

「……………そんなに大きな声で言ったつもりはないのだが。」

幸いな事に、この車両には他の乗客は1人しかおらず、その1人も

ぐっすり眠っていたので大丈夫だろう。

カナはほうつと心底安心したように胸をなで下ろし、「人前でそういう事は言わないで！」とお叱りを受けた。だったら始めから女装そんなカッコしなけりゃいいのに……。

「それは、今から話すわ。HSSは、その能力を発動するのに条件がいるのよ」

「……条件？」

「そうよ。血中の エンドルフィンが一定以上になる……つまり、性的興奮状態に陥ると、常人の約30倍の量の神経伝達物質を媒介し、大脳、小脳、脊髄といった中枢神経系の活動を劇的に増進させるの。その状態になると、理論的思考力、判断力、反射神経などあらゆる能力が……」

「ちょ、ちよつと待った！」

これ以上は俺の脳がパンクしかねない。一気にどんだけ難しい事をペラペラ言ってくるんだこの人。

「つまり、さっきの話をまとめると……遠山一族にはHSSと呼ばれる遺伝的体質があり、性的興奮を味わう事でその状態になり、いろんな能力が飛躍的に上昇する、と？」

「まあ大体そんなカンジね。正確には30倍くらいに上昇するんだけど」

おいおい……つまり、この人が女装してるのはそのHSSになるからで、その状態だと普段の30倍、つまり俺が入試の時に

闘ったあの金一さんよりも、今の金一さん、つまりカナは30倍強いのかよ……！どんなチート能力だ。ナルトの影分身の術や悟空の界王拳や超サイヤ人並に卑怯だ。普通に考えて同じ訓練をしても常人の30倍のペースでそれが実るんだから。

……ちよつとからかつてみたくなってきた。

「でも、なんでそんな変態の極地みたいなDNAが存在するんですかねえ？」

「……たしかに普通じゃないとは思っけど、そのDNAを持つてる当人の前では言わないでほしいわ……」

〈ハンカチで顔を隠す〉
「HSS(笑)」

「それ以上は言わないでね」

カナは腰のホルスターから拳銃を……って危ねえ！！

「すみません悪ふざけが過ぎました！」

第六感が危険を察知し、俺は即座に席から跳んで空中で土下座の姿勢を作り、そのまま着地して床に額を付ける。この1カ月で編み出した俺の必殺技、『フライング・土下座』だ。全くもって要らんモンを作らされてしまった。コレも生存本能の成せる業か。

カナはさっきの事を許してくれたらしい。ただ「今度言ったら八千の巢になるよ」って言っていたので俺はこれ以上HSS類でこの人をからかうのはよそうと心に決めた。

「ところで、今日の依頼クエストってなんなんですか？」
今回の依頼は金一さんが持ってきたのだが、俺はその内容について全く聞かされていない。よって、これからどこに何をしに行くのか全く知らないままついてきたのだ。

「あー、まだ言っ
てなかったわね。でも、もうちょっとで着くから。現場に行けば解るはずよ」

「………?」

その時、俺はカナの言っていた言葉の意味がわからなかった。

T
O
B
E
C
O
N
T
I
N
U
E
D
.
.
.
.
.
.

HSSは男のロマン（後書き）

今回はHSS、もといヒステリアモードについての説明でした。

やっぱり、響哉には遠山家の秘伝を教えておかないといういる都合が悪いことがあるんですよ。主に作者なのですが（笑）。

任務の方は、また次回という事になりましたがきちんと考えてあります。問題はそれをどう文章にすべきかですが……………。

それと、気が付けばお気に入り登録が1件ありました。とても嬉しいです。

次話もできるだけ早く投稿するつもりです。

「非道過ぎる」(前書き)

最近前書きで書くことが少なくなってきました……。今回は八雲戒のプロフィールを載せたいと思います。

八雲戒

身長180cm、体重73kg。

東京武偵高1年A組 強襲科Cランク

任務や訓練以外ではいつも伊達眼鏡を掛けている、俗に言う『チヤラ男』。台場辺りでナンパして彼女を作ったりしているが、最高で2ヶ月しか持たない。最短記録は4日間。

根はいいヤツなので同じクラスの生徒からの評判はいい。

使用拳銃はトカレフTT 33。

「非道過ぎる」

女装した金一さんことカナに連れられてやってきた場所は、なんと俺の父さんが昔務めていた職場、警視庁だった。

「カナ、なんで俺をこんな場所に連れて来たんだ……？」

さつき来る途中、私カナの時はタメ語でいいと言われたので俺の言葉遣いは龍達に使うソレと同じだ。

「今回の事件現場なのよ、警視庁は」

「どどういうことだ？」

ここは、大昔から日本の安全と平和を護ってきた警察の、総本山なんだぞ。そんな所で事件だなんて、にわかには信じられない。

「ついてきて」

カナに言われるがまま、俺は警視庁の中に入っていく。ここに入るのは久しぶりだ。まだ武偵制度が日本で認められてなかった頃、当

時この鑑識だった父さんに着替えを持ってよく母さんと来たものだ。今から思うと懐かしい。

警視庁には鑑識がない。全員、東京武偵局やら武偵庁やらに引き抜かれていった。

犯罪が凶悪化する中、ただの鑑識にさえ帯銃を余儀なくさせてしまえばそれはもう警察では無い。武偵となる。

武偵高にも鑑識科レシマがあるように、今や鑑識と言ったら武偵になってきている。

だが、警視庁で起こった事件となると、本来なら武偵庁や東京武偵局の鑑識が駆り出されるのではないだろうか。そもそも、俺も金一さんも鑑識ではないのだがいいのだろうか。

エレベーターに乗って、上の階へ行く。しばらくしてエレベーターが止まり、その分厚い鉄の扉が開かれた時、俺は絶句した。

「な………なんだよ、これ………」

寒気がした。吐気も催した。なにより、呼吸をしなくなかった。

なぜなら、俺の眼前に広がっていたのは……

．．．．．人の血によつて真つ赤に染められた床。
そして大量の血が飛び散つた壁と天井だった。

脳内でまず過つた言葉が、『地獄絵図』。次に、『血の海』。

辺り一面真っ赤に染められた通路は、非常線を張られたただけでそこには俺とカナ以外誰もいなかった。

カナは鞆からファイルを取り出し、ソレに書かれている文章を読み上げ始めた。

「昨夜、警視庁に何者かが侵入し、たまたまそこに居合わせた刑事3名を殺害。犯人は逃走し現在行方不明。報道規制が敷かれて電波には乗らなかつたけど、警視庁の関係者と武装検事、一部の武偵には情報が渡っているわ」

カナは淡々と読み上げた後、ファイルに付いていた写真を俺に渡した。

「……………!？」

俺は、驚く事しかできなかった。

その写真に写っていたのは、バラバラに飛び散った肉片と、下半身、そして遠くに転がっている……人の、頭だった。

それが、3つずつ。この人達はさっきカナの言っていた、『3人の被害者』だろう。

「……非道過ぎる……」

俺は、父さんの影響と武偵を目指す事も相まって、凄惨な現場も写真でだが何度か見たことがある。

だが、今回のこれは肉眼で見たという事を差し引いても、あまりにも衝撃的すぎる。

「殺害された刑事3人の遺体の共通点は、全員胴体が無い…….
と言うより、飛び散っていたこと。それと、その飛び散った肉片が凍っていたことよ」

カナの話で、俺はある武器を連想する。

「ガスナイフ、ですか……?」

俺は口を手で押さえながら言った。

「おそらく、その通りよ」

・・・ガスナイフ。

対猛獣用の近接武器で、ナイフの柄の部分に内蔵された超低温のガスを先端から放出し、細胞を瞬間冷却してガス圧で爆散させる凶悪な武器だ。

「一体、どこであんな獲物を・・・」

「犯人に関しての情報は一切無いわ。・・・そろそろ、行きましょう」

カナモ、この光景は衝撃的だっただろう。現に顔色も少し悪くなっている。

休憩室で休んでいる時、俺は今日どうして金一さんがカナの姿で警視庁に来たのかが分かった。

カナは、すれ違う警官から声をかけられているのだ。それも昔から知っているように、ごく自然に。

つまり、『顔が利く』ということなのだろう。だからあっさりと現場に入れてもらえたのだ。

「で、何で俺を連れてきたのかをまだ聞いてないんですけど」
休憩室の椅子に腰かけ、まだ一口も口を付けていないコーヒを飲む。

「……やはり、不味い。アレを見た後だと、やはり口に入れる物全てが不味く感じる。」

「アレをやった犯人が、あなたがこれから戦っていく敵になるかもしれないの。だから、ここに連れて来たの」
「……俺がこれから戦っていく、敵？」

「カナ。それはどうということなんだ？」
俺はなるべく平静を装おうとしたが、その声は微妙に震えていたと自分でも解った。

「答えは、近いうちにわかるわ。さっきの事件の話に戻すけど、3人の死亡推定時刻の少し前に、警視庁のコンピューターからあるデータが持ち出されていたの」

「ある、データ・・・？」

「そう。そのデータは、日本の武偵、武装検事、公安0課の個人情報よ」

この場合の個人情報とは、一般人の個人情報より、さらに秘匿性が高い情報の事を指す。

名前、住所はもちろん、その人のランク、戦闘能力、経歴などの武偵などにとっては外部に知られたくない情報なのだ。

それが、盗まれた。

犯人が欲しかったのは、情報。その情報をどこかの組織にでも売り払うのだろうか。あまり大きな金にはならなさそうだが、1つの組織じゃなく複数の組織に売ったら、かなり大きな額になるのかもしれないが。俺にはそんな事は分からないが。

だが、俺には解っていたことがある。

カナが、金一さんが、今回の事件について何か決定的な証拠、それが確信があると言う事を、俺は第六感から読み取っていた。

しかし、カナは話そうとはしなかった。隠し事は無しと言っただけりなのに、だ。

つまり、『何か俺に言えない事情があった』のではないか。

だったら待とう。俺に話してくれるその日を。

今の弱い俺には、それしか選択肢は無いのだから………。

T
O
B
E
C
O
N
T
I
N
U
E
D
.
.
.
.
.
.
.

「非道過ぎる」（後書き）

ガスナイフの元ネタは、アイシールド21の村田先生が2009年にジャンプで掲載させた『BLUST!』の敵キャラです。

この事件の犯人はオリジナルなんですけど、まだオリ敵は出す予定です。それも、チートじみた。名前を考えるのが大変です。

世の中は諦めが肝心と言う人もいるが、やっぱり諦めたらそこで試合終了だと思

この小説のサブタイが、なぜか銀魂のソレのようになってきている気がします。

ところで、さつき気が付いたのですがこの小説の感想が送られてきていました。昨日気付かなかった自分が恥ずかしい……。地味にお気に入り登録件数も2件に増えていたので、作者は嬉しくてちよつと涙目です。冗談ではなく。

それと、響哉の同居人3人目の春樹のプロフィールを掲載しておきます。本編で使えるかどうかは正直微妙ですが……。

御園春樹

東京武偵高1年A組 強襲科Bランク

身長163cm 体重48?

響哉たちと比べると小柄で、中学生のような見た目。一部の女子に熱狂的な人気がある。

誰にでも人当たりが良いので誰とでも友達になれる、ある意味強襲科にもつとも必要とされる能力を備えている。

真つ向から勝負を仕掛けるのではなく、相手の不意を突いたり閃光手榴弾や煙幕などの道具を使って相手の動きを阻害してから強襲する攻撃が得意。良く周りから「顔に似合わない」と言われるが、本人は全く気にしていない。

Bランクなのは、直接闘うと身長や筋力の差でどうしても劣勢になってしまうから。入試の時も罫を仕掛ける前に他の受験生とはち合わせてしまい、手酷くやられてしまった。

実はその時、響哉に介抱してもらったのだが当人は気絶していて憶えていない。響哉にいたっては介抱したこと自体忘れかけている。

使用武器は『SIG SAUER Pro SP2009』のマニ

ユアルセーフティ追加モデル。

これで同居人3人の説明は終わりました。他の2人は前と、その前の前書きに載せてあります。

今回は金一さんやカナ、同居人は出てきません。しかしあのチョイキャラが出てきます。原作10巻を読んでない人にも分かるように説明はありますが、何気にこれから先けっこう出てきそうです。

世の中は諦めが肝心と言う人もいるが、やっぱり諦めたらそこで試合終了だと思

あれから、まあいろいろカナから事件の説明を受けた俺は、結構早い時間に学園島に帰ってきた。

帰る時まで金一さんがカナの姿だったので、「なんか恥ずかしいからそのトイレで着替えてくれ」と言ったら、「それだけは勘弁して」と両手で俺の肩を掴みながら俯いて言った。過去にトラウマでもあるのだろう。八手の巣にされるのはご免なのでそっとしておいてやろう。

それと今、俺は思う事が一つある。それは……

「げっ………!!」

今日が、厄日だという事だ。

「ほぼ初対面の女性に対しての第一声がソレだなんて、失礼じゃないの？」

もうカナとは別れた。いや、恋愛関係的な別れたじゃない。俺はゲイじゃない。単にあの人は寮に戻って、俺は強襲科の体育館に射撃訓練でもしようと思って別れたのだが、面倒だからと一般校区を通る近道を使ったのが間違いだった。

目の前にいる外人みたいな美人の名は、時任ときとうジュリア。俺と同じクラスで、席が俺の列の一番後ろなのでプリントなんかの提出物を集める時に「プリントは？」、「やってない」のやり取りをほぼ確実にしてしまうので名前も顔も憶えている。

少し俺の知っている彼女について説明をしておこう。

彼女はロシア人とのハーフで、所属は超能力捜査研究科。通称、『SSR』。SSRの説明は今回は省略だ。偏差値40ちょっとのこの武偵高《バカの吹き溜まり》で全国偏差値65を記録。生徒会の副会長を務め、卒業したら旧ソ連からあると言われるモスクワ大学の超心理学科に進学する事がすでに決まっている、まさに天才と呼ぶに相応しい人なのだ。

だが、彼女は『ある能力』によって孤立している。

スキャンメトリー
脳波計と呼ばれる超能力だ。
ステルス

彼女は、周囲に居る人の脳波を読み取ることができる超能力を持っているのだそうだ。

で、その読み取った情報で当人が怪我しそうな事があればそれを伝

えるのが彼女のルールなんだとき。自己紹介の時に言っていた。だが、彼女に頭の中を覗いてもらった人は自分の秘密が暴露されて赤面してギャアギャア騒ぐので、彼女はこうして見事にたった1カ月で周囲から孤立してしまっていた。空気読めよ。

正直、超能力なんて俺は信じちゃいない。そんなオカルトが通用するのは、少年漫画の世界だけで十分だ。

だが現実にはそんな超能力を大真面目に研究するSSRがここ東京武偵高にも設置され、『超偵』などと言う新しい単語まで生まれた。一昔前の人が聞いたら腹を抱えて笑いだすか絶句するかのどっちかだぞ。俺は絶対笑えないと思うが。

顔とスタイルが良いのと、触れれば切れるような伶俐な雰囲気から、一部の男子に人気があるが、俺はそっち系じゃないのでよくわからない。

「一応、言っておくけど……私は対象に触れないと脳波を読むことはできないの。だから、触らなければ何も読めやしないわ」

「おかしいな。口に出した覚えは無いんだけど」

「読心術くらい使えるわよ」

そう言う時任は無表情だ。ちょっと背中に冷たい物を感じる。

もうお前、尋問科^{タギユラ}行けよ。こんなピンポイントで言い当てられるんなら脳波計使わなくてもSランク間違いなしだろ。

「あなた、私のクラスの朱葉響哉よね？」

「そうだけど。何か俺に用があんのか？」

「ーか俺、何しにここ来たんだっけ。あ、射撃訓練しに強襲科に行く近道を通ったんだっけ。」

「本当は男なんかとは1秒でも長く話していたくないのだけれど、この先に行くのはやめておいた方がいいわ。今向こうに……」

「……今、しれつと最低な事言ったぞ。どこのIS^{女尊男卑の}世界から来た女だコイツ。」

「あー！うっせえ！お前が俺の頭の中覗けようが何だろうが知ったこっちゃねえけどな！俺は！自分の行く道くらい自分で決める！誰がお前の指図なんか受けるか！」

時任の目の前に立ち、人差指を目頭の辺りに当たらないように指して俺は言い放った。

時任は、面喰らったような顔になってその薄青い目を見開いて俺の指先を見ていた。

「じゃあな」

俺はさっき時任が行かない方が良いと言っていた方に、真っ直ぐに歩きました。

うん。やっぱり、人の忠告は素直に受け取っておくべきだった。

「……………」

「……………」

「……………」

俺は今、左右を校舎の壁に遮られた、一本道のようになっている場所に居るのだが……………。

なんで、あの3人がこんな場所で揃ってんだ……………！

俺の目の前にいるのは、人間バンカーバスターというとんでもないあだ名を持つ、我らが強襲科の鬼教官にして一番の問題児、蘭豹。その蘭豹と親友のはずなのだが、どうやら煙草が無いらしくドス黒いオーラを滲ませている尋問科の綴。

背後に立ったというだけの理由で毎年数名の生徒を手刀で骨折させている、狙撃科スナイプのリアルゴルゴ、南郷。

この狂った武偵高の中でも間違いなく狂っているランキングベスト5に入っている3人が、揃って睨み合っているのだ。

いや、あと1人いる……………第六感がこんなどうでもいい場面

で更なる進化を遂げてきた。

3人の強烈な気配の中に、もう4人目の気配を感じる。

だが、3人の他には誰もいない（鳥や虫なんかもない）。となると、いるのは誰もその姿を見たことが無い諜報科シザトのチャン・ウーか。よくもまあここまでの面子が揃ったもんだよ。

それも、蘭豹は酒飲んで酔っ払ってて、綴はあの妙な煙草を切らしていて、俺の今いる位置は丁度南郷の背後で、このまま行ったら間違ひなく逝くことになるだろう。

普段の俺なら引き返す。だが、時任にカツコつけてあんな事言っちゃった後だし、今更引き下がれない。かといってこのままここでじっとしていられるかと訊かれれば、まず無理だろう。アイツら、変なカンには妙に鋭いし。

これで救護科アンビュラスの矢常呂も居たら、東京武偵高のビッグ5が集結する事になるな。

俺が心の中で現実逃避を始めた時だった。

その矢常呂が、何やら沸騰しているかのようにブクブク言わせている緑と紫の液体を大きめのビーカーに入れて4人の殺伐とした空気の中に入れていきやがった。ビッグ5、集結しやがった。

つてか、お前は何なんだよ！なんで普通に参加してんの！？なんでお前から始めから5人でしたよみたいなカンジでいんの！？

………そんな事を校舎の陰から覗いて考えていた時だった。

『ギンツ！！』×5

………やつちまった………。

「うおおおおお！！！」

こつなりやヤケクソだ！先手必勝とばかりに俺は5人のクレイジーティーチャー達に単身で跳び出し、胸のホルスターからブレン・テ
ンを取り出した。

武偵憲章5条、行動に疾くあれ。先手必勝を旨とすべし。だ！

「ぎやあああああ……！！！」

俺の悲痛な断末魔が、学園島に響き渡った。

・ 次
・ に
・ 俺
・ が
・ 意識
・ を
・ 取り
・ 戻
・ した
・ 時
・ 、
・ 目
・ に
・ 映
・ っ
・ た
・ の
・ は
・ 知
・ ら
・ な
・ い
・ 天
・ 井
・ と
・ ・
・ ・
・ ・

「……………時任……………」

「……………俺の寝ているベッドの横に座っている、時任ジュリアだった……………」

T
O
B
E
C
O
N
T
I
N
U
E
D
.
.
.
.
.
.
.
.

世の中は諦めが肝心と言う人もいるが、やっぱり諦めたらそこで試合終了だと思

以前、響哉の幼馴染をメインヒロインにすると書きましたが、流れるに時任さんになりそうです。ごめんなさい。でも、近いうちに出るときはします。

時任さんは、原作では脳波計によって他人から避けられる『孤独な天才』みたいなキャラだったので、『もし仲間がいたら』という完全な作者の妄想から登場させてもらいました。この小説での彼女のプロフィールも、そのうち載せておきます。

ちなみに、なぜあんな場所にビッグ5（完全に遊戯王のパクリ。原作にはそのような事は書かれていません）が居たのかと言うと、昨日の夜に初めの4人で麻雀を徹夜でやっていて、「今日はどうする？」という話を睡眠不足の状態でしていたからです。矢常呂先生は4人に頼まれて、同じく寝ないで作った眠気覚まし（イチゴ風味とメロン風味）を持って来ただけだったりします。
……って、かなりムリがありますね。

響哉は南郷の後ろに立っていたので、まず南郷にボコられ、酔っていた蘭豹がそれに参加。綴も煙草が切れてイライラしていたので参加。チャン・ウーと矢常呂は世間話や響哉が何秒奮闘するか賭けていました（結果は2人の予想を遥かに超える10秒。チャン先生は3秒、矢常呂先生は5秒でした）。
まあ、武偵高の教師3人を相手にするのは自殺行為に等しいという事で……。

最後はエヴァみたいな終わり方になってしまいました。が、作者は微妙にしかエヴァを知りません。アニメは全話見たハズなんですけどね。旧劇場版も。ネットですが。

地味に響哉がハーレム状態になっていきそうですが、多分なるんでしょっね。あくまで「地味に」ですが。

「またな」（前書き）

最近、クラスで風邪が流行りだしてきました。

そろそろストーブを引っ張り出していきたいのですが、最近ではパソコンのバッテリーの熱で暖をとっています。足の上に置くと暖かいんですよこれが。

夏は地獄ですが、冬は快適！のはずです。ただ単にバッテリーがおかしいだけなんですけど。

「またな」

普通の学校なら今俺が居る部屋は保健室と言うのだから、残念ながら
から武偵高にそんな部屋は無い。代わりにあるのは救護科だ。
アシヒュラス

そのベッドの上で俺が目覚めたという事は、俺はあの5人に酷くや
られたのだろう。実際には3人だが。

だが、なんで時任^{ときとう}は俺の横にいるんだ？

あの5人が俺をここまで運んでくれるとは、太陽が西から昇ろうが、
北半球と南半球が入れ替わろうが、彗星が地球に直撃しようが信じ
られない。

ということだ。

「まさか、お前が俺をここまで運んで来たのか……?」
まさか、とは思うがな。

「その通りよ」

「……そんな、まさか……」
「まさか」が起きやがった……!!

あの時任が！クソ教師共にボッコボコにされて気絶していた何とも
可哀想な俺を！わざわざこんな所にまでおぶってきただとオ!?

「今日は人類が滅亡するかもしれないな」

「確かに、今日10月28日は人類が絶滅する日とマヤ文明の予言、
NASAの太陽フレアの予測からそう言われています」

「……まだ5月だぞ」

時任のわけのわからん話はともかく。

「お前が、俺を運んできてくれたのか……?」
俺が訊くと時任はコクンと無言で頷き、そのまま俺の顔をじっと見
ていた。

つか、普通に美人過ぎる時任に見つめられると、健全なる男子高
校生の俺は無性に恥ずかしいのだが……。

「……な、なんでそんな事したんだよ」
俺は恥ずかしくなって、時任にそっぽを向くように窓の外の夕焼けを……って、俺どんだけ気絶してたんだよ。

「……怒ってる?」

「いや、なにを」

俺はつい、あまりにも弱々しい声でそう言った時任の方を見てしまった。

俺の目に映っていた時任の姿は、さっきまでの刃物のような雰囲気は消え、俯いていた。

「なにつて……私、あなたをここに運んでくる時、あなたに『触れた』のよ。あなたの思考を、勝手に覗いたのよ」
……あー、そういうことか。つまり、勝手に俺の頭の中覗きこんだから、それに罪悪感を感じているってことか。

「そんなの、不可抗力だろ。っていうか、あの馬鹿教師共クレイジーティーチャーズにボコられて気絶してた俺をここまで運んでくれたんだ。感謝する覚えはあっても怒る理由はねえよ」

「で、でも……」

「でももへつたくれもねえよ。残念ながら、俺にはお前が何考えてるかなんて分かりっこねえけど、俺は、お前に助けてもらったんだ。だから感謝してる。これは本当だ。証拠に……」

俺は、時任の手をとり、その掌を俺の頭にむりやり押し付けた。

「……！や、やめ……」

「他人の考えてる事が解るんだろ？ だったら言葉なんぞよりもっと正確に教えてやる。これが、俺の正直な気持ちだ」

よく、漫画に『言葉は不完全なもの』と書かれる事がある。実際、俺も自分の気持ちを言葉で相手に伝えるなんて器用な事はできない。だから、もっと確実に、正確に伝えてやる。そうすればコイツもいつもの時任に戻って、このなんか変な感じも収まるはずだ。ひいては俺が早くここから帰れることにも繋がる。

「……でも、なんか時任の手が心なしか熱い気がするな。気のせいだろうか。顔も若干赤いし、風邪か？ うつされたらかなわんな。20秒くらい経っただろうか。時任は急に俺から手を離し、さっきまで頭に当てていた右手を胸の前で左手で隠すように握っていた。どうした突然。」

「……お、お……」

「『お』?」

本当にどうしたんだ時任のヤツ。さっきまであった俺の時任のイメージがガラガラと音を立てて崩れていくんだが。

「お前の思考が、読めない……。一体、どうしたというのだ。……?」

ボソツと時任が呟いた言葉は、あまりにも小さすぎて俺には全く聞こえなかった。

「おい、時任。さっきからどうしたんだよ」

「う、うるさい！お前には、か、関係無い！……。どういことだ。コイツに触ると、頭が真っ白になる……。まさか」

なんか最後の方をぼそぼそ呟いていたが、サササツと扉の前まで移動し、その場でしゃがんで読唇術をされないように口元を隠していて俺には全く聞こえなかった。めちゃくちゃ速かったな、今の動き。

「これが……。そうなのか?」

「なにがそうなんだよ」

俺がベッドから出てなにやら独り言を言い続けている時任の横から外に出ようとすると、

「きゃあ!?!?」

……。悲鳴を上げてビクツとしてその場でちよっと跳んだ。

「何やってんだよ………」

「うっ、うるさい！そこどけ！」

時任は俺を突き飛ばし、さっきまで俺が開けようとしていた扉をこ
れでもかというくらいの勢いで開けた。扉壊す気かよ。

そのまま帰るのかと思いきや、時任は急にこっちを振り向いた。

「またな。響哉」

時任はそれだけ言って部屋から飛び出して言った。

1人取り残された俺は、扉の修理申請をしなければと思い、教務科に書類を提出しに行った帰り、

「……そういやさつき時任のヤツ、俺のこと名前で呼んでなかったか？」

あと、やっぱり顔が少し赤かった気がする。やっぱり風邪か？

気づけば時刻はもう6時半を過ぎていた。武偵高に吹く5月の海風は、まだ肌寒いものだった。

T O B E C O N T I N U E D

「またな」（後書き）

やっぱり恋愛描写って難しいですね。書いててよく分からなくなってきました。恋愛経験でもあればもっとマシな文が書けるんじゃないかな。けどね。

狙撃科の志波さん（前書き）

気がついたら11話。けど物語はまだ1カ月くらいしか経過してませんね。このペースだと原作の話が始まるのはいつになる事やら・・。

タイトル通り、今回は原作7巻で一瞬出てきた志波凪子さんの登場です。誰も待っていない上に存在すら微妙なキャラが2人続けて登場と言つのも盛り上がり欠けると思いますが、そこは温かい目で見ちゃって下さい。

狙撃科の志波さん

アドシールドという行事があるのを、俺はすっかり忘れていた。

5月の終りに行われるこの行事は、武偵高の国際競技会である。まあ、インターハイのようなものだ。行われる競技は主に強襲科アサルトや狙撃科スナイプによる銃を使った競技しかないのだが。

だが、その祭の最後の締めである生徒による有志バンドの演奏とチアは一般にもウケが良いので毎年やっている。俺も何度か見たことがあるが、競技はやっぱり一般人にはわかりにくいものだった。

ちなみに、このアドシールドで優秀な成績を残すと症状と共にメダルがもらえる。そのメダルを持っていると、どこの武偵大学にも推薦で進学でき、武偵局には無条件でキャリア入局。民間の武偵企業だって一流から超一流まで選びたい放題。まさに人生バラ色だ。

金一さんが参加したら優勝は間違いないのだが、「面倒だからパス」だそう。代表の誘いは来たそうだが、断ったそう。勿体なくな

いか？

ちなみに俺には拳銃射撃競技ガンシューティングの代表補欠に選ばれた。俺の場合は断る理由も無かったので引き受けたが、補欠なので出番は無いだらう。

「響哉。競技の特訓はしなくていいのか？」

そう言っただけでさつきまで寝ていた俺の隣にやってきたのは、SSRの期待の星、時任トキヨウジュリアだった。

ジュリアはあの看護科アンビュラスの物損事件以来、やたらと俺に声をかけてくるようになった。拳句には「お前の事を響哉と呼ぶからお前も私の事をジュリアと呼べ」と言っただけだった。なんでだと訊くとなんでもだ！としか返してこない上に苗字で呼ぶと一々ソレを注意するので仕方なく俺も名前と呼ぶことにした。女はよく分かん。

俺とツルみ始めてから、ジュリアは周囲からも少しではあるが態度が軟化された。今では同性の友達も数人いる。

「俺は補欠だから、出番なんてどうせ回ってこねえよ。お前こそ、チアの練習しなくていいのか？」

「これからやる」

ジュリアはアドシアードの最後にやるチアのメンバーに入っている。顔もスタイルもハーフだけあってかなり高いポイントなので、多くの男子生徒は喜んでいたが……。

「ていうか、なんでお前は急にチアをやりたいなんて言い出したんだ？みんな喜んでるからいいけどさ」

教科書をロッカーに押し込んだ後、他の半分くらいのかるゝい鞆を担ぎながら訊くと、ジュリアはそっぽを向いてしまった。

「……お、お前に見てほしかったからなど……言えるわけがないだろう」

最初の方が聞こえなかったが、どうやら言いたくない事らしいのでこれ以上は聞かないでおこう。俺は空気の読める男だからな。

学食で、俺はどういう訳かジュリアと2人で昼飯を食っている。龍達同居人3人は、有志バンドの練習を見に行くとかで一緒じゃない。俺としてはいてほしいのだが……。
冷やかしと思われるのも嫌なので一緒に行くかと誘われた時は断ったが、これは行った方が良かったな。

「そつえば、私達のクラスからアドシアードに代表として出場する女子の事を知っているか？」

突然ジュリアがボルシチを食べていた手を止め、そんな事を訊いて

きた。

「ん？いや、知らん。最近いろいろあったからなア」

主に、ジュリアの事と……警視庁の殺人事件の事。

あの事件に関しては、カナから「これ以上関わるのはまだやめておきなさい」と警告され、詳しい事は何も知らされていない。そして、金一さんはその事件の調査のために学校を休むことが多くなった。俺も手伝おうとしたが、「まだ関わるなど言っただはずだ」と叱られてしまった。

だが、『まだ』と言っただ。つまり、『これから』知る事になるであろう事件なのだ。そしてその犯人は未だ逃走中。またこれから同一犯による惨劇が繰り替えされる可能性は、十分にある。

次起こった時、俺は金一さんと共に事件に関わっていけるのだろうか。それとも、前と同じように置いていかれるのだろうか。

やっぱり、実力が足りないんだろうな。刑事3人をあんな風に惨殺する輩が相手となると、経験も必要になってくるだろうし。

「響哉、私の話を聞いていたの？」

ああ、そういやジュリアの事すっかり忘れてた。

「いや、まったく」

俺はラーメンをふうふうと冷ましてから食べた。うん、美味しい。

「そこまでくると怒りを通り越して呆れるわ……」

「そりゃどうも」

「褒めてない！せっかくクラスメイトが代表に選抜されたんだから、応援してあげましょうよ」

「べつにいいけどよお」

どうでもいいけどジュリアよ。ボルシチ冷めてないか？

ジュリアにむりやり連れられて来たのは狙撃科棟の地下……狙撃レーンがある場所にやってきた。

そこでは日夜狙撃科の生徒たちが肉眼では豆粒みたくに見えるにバスバスと狙撃銃で撃ちまくっている。

その中に、見覚えのある女子生徒が1人、いた。

志波だ。匍匐^{ほふくしよつたい}状態でライフルを構え、狙いを的に絞っている。

使っているライフルは、イギリス軍に採用されている『L118A

1』。高い命中精度を誇るいいライフルだ。

何発か撃った後、ヘッドフォンを外して飲み物を飲んでいた。どうやら休憩に入ったようだ。

「よう、志波」

「あ、響哉君とジュリアじゃないですか。最近よく2人でいますよね」

「成り行きでな。で、どうなんだ？調子の方は」

志波は「まーぼちぼちですね」と言っ、ブルーベリーの錠剤を2粒呑み込んだ。

そっぴや狙撃科では視力向上のためにブルーベリーを育ててるんだっつたな。まさかそれで作ったんじゃないやあるまいな。

「なんだ響哉、お前と子と仲が良かったのか」

「お前、コイツの席知らないのか？俺の右隣だぞ」

「そっぴえばそうだったな」

武偵高のクラスの席は、何ヶ月かに1回のくじ引きによって決まるよって、出席番号順なら左の前の方になる俺の席は若干ど真ん中の右後ろ寄りの微妙な所にいる。

その微妙な俺の席の右隣にいるのが、何を隠そうこの志波なのだ。

ちなみに初めて話したきっかけは、志波の落とした消しゴムを偶然

起きていた俺が拾ってやったことという古い漫画じみた事だというのだから、事実は小説より奇なりとはよく言ったものだ。

「中子、応援に来てやったぞ」

相変わらずの上から目線の言い草で、ジュリアが一步前に出た。

「応援に来たヤツの言い方じゃねえだろ。志波、がんばれよ。クラスの皆も応援してっからよ」

ジュリアの下手すぎる言い方では、志波の機嫌を悪くしかねないのになんとかフォローを入れておいてやる。

「フフツ。2人共、ありがとう」

ふう。どうやら機嫌を悪くしたわけじゃなさそうだ。

その後、ジュリアを1人で残しておくわけにはいかないので俺も志波の訓練の様子を見ていて、結局夕方まで狙撃科に居座っていた。

……その帰りのこと。

「結局、ずっと狙撃科にいちまったな」

「いいじゃない。たまには他の学科の訓練を見学するのも」
まあ、それはその通りだから俺は何とも言えないんだけど。

「……大丈夫よね？」

女子にしては低い声を、さらに不安そうにしたジュリアの聲がまだ冷える空気を震わせた。

「志波の事か？俺達が決める事じゃないだろ。でもま、あの調子なら問題ないと思うぜ」

正直、俺にはそんな事は微塵も解りはしない。でも、このままジュリアが不安そうにしているのは見たくなかった。

アドシールド当日、俺は狙撃競技スナイピングの競技会場である狙撃科地下の狙撃レーンに来ていた。クラスのヤツらも結構いる。

だが、志波の姿はそこにはなかった。

俺はジュリアが志波を呼びに行ったのもうそろそろ出てくるだろうと思っていた。

そんな時、ジュリアから電話がかかってきた。周りには人が多かったので、人気の少ない廊下の隅に行って通話ボタンを押すと、ジュリアがひどく焦った様子でもんでもない事を伝えてきた。

『響哉、大変だ！ 母子が…… 母子がどこにもいない！』

俺はジュリアの言っている事が、一瞬理解できなかった。

TO BE CONTINUED……

狙撃科の志波さん（後書き）

アドシアードⅡ誘拐のフラグという方程式ができ上がっていく感じ
がしますね。そんな事は無いんですが。

この小説における時任さんのプロフィールを掲載させておきます。

時任ジュリア

東京武偵高2年A組 超能力捜査研究科Aランク

身長172センチ 能力-脳波計

ロシア人とのハーフ。ファンクラブができるほどの美貌と、高い偏
差値を誇るまさに才色兼備の天才。

原作では友人関係は皆無となっているが、本作では響哉と出会った
事により少しだけであるが友達がいる。狙撃科の志波妹子もその1
人。ひそかに響哉に恋心を抱いている。

使用拳銃はマカロフ。

こんなところでしょうか。志波さんのプロフィールもそのうち掲載
すると思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9197x/>

緋弾のアリア UNITY

2011年10月29日02時05分発行